

第4．ゾーン別基本方向

前述の基本方策を踏まえ、生活創造圏に基づくゾーン別に基本方向を検討する。

具体的には、ゾーンごとの海辺の資源分布状況などを考慮した性格づけ（コンセプト）を試み、資源活用と新たな整備方向について検討してみた。

なお、このような検討は本来多様な主体の参加と連携のもとで議論を積み重ねられるべきものである。従って、ここでの検討結果は、あくまで、多様な主体の参加と連携のもとで議論していただく際の参考資料、ケーススタディとして提示するものである。

1. 桑名ゾーン（木曾岬町～桑名市）

【基本コンセプト】

“ 海と川が織りなす親水交流ゾーン ”

木曾三川河口部という地形条件と、名古屋市に近く交通網も発達している地理的条件が特徴であり、海と川が織りなす親水資源を活用し、自然との交流を求める都市的ニーズに応えていく。

【基本的な方向】

名古屋市に近接し、かつJR、近鉄の鉄道網、東名阪自動車道、伊勢湾岸自動車道（第二名神高速道路）の高速道路網の中にあつて、都市的利用のポテンシャルとニーズには大きいものがある。しかし、現時点では必ずしも資源を活用しきれていない状況にある。

このため、既存の大型テーマパークである長島スパランドや国営木曾三川公園の立地を活かしつつ、海面利用のレクリエーションや体験漁業との連携など、伊勢湾や木曾三川との関連性を高める仕掛けづくりが期待される。また、木曾岬干拓地における都市的利用の具体化も図っていく必要がある。

一方、木曾三川河口部にあたることから極めて親水性の高い自然環境、眺望に恵まれているとともに、旧東海道で唯一の海上路であったこと、水害との深い関わりなどから歴史・文化資源にも恵まれたゾーンである。

このため、既存の歴史・文化、グルメなどの資源のネットワーク化を強化して相乗効果を高めていく必要がある。また、木曾岬干拓地における親水空間の形成を検討する必要がある。

【主なアクセスポイント】

長島スパランド

七里の渡し跡、桑名城跡

伊勢湾岸自動車道（第二名神高速道路）の架橋（ビューポイント）

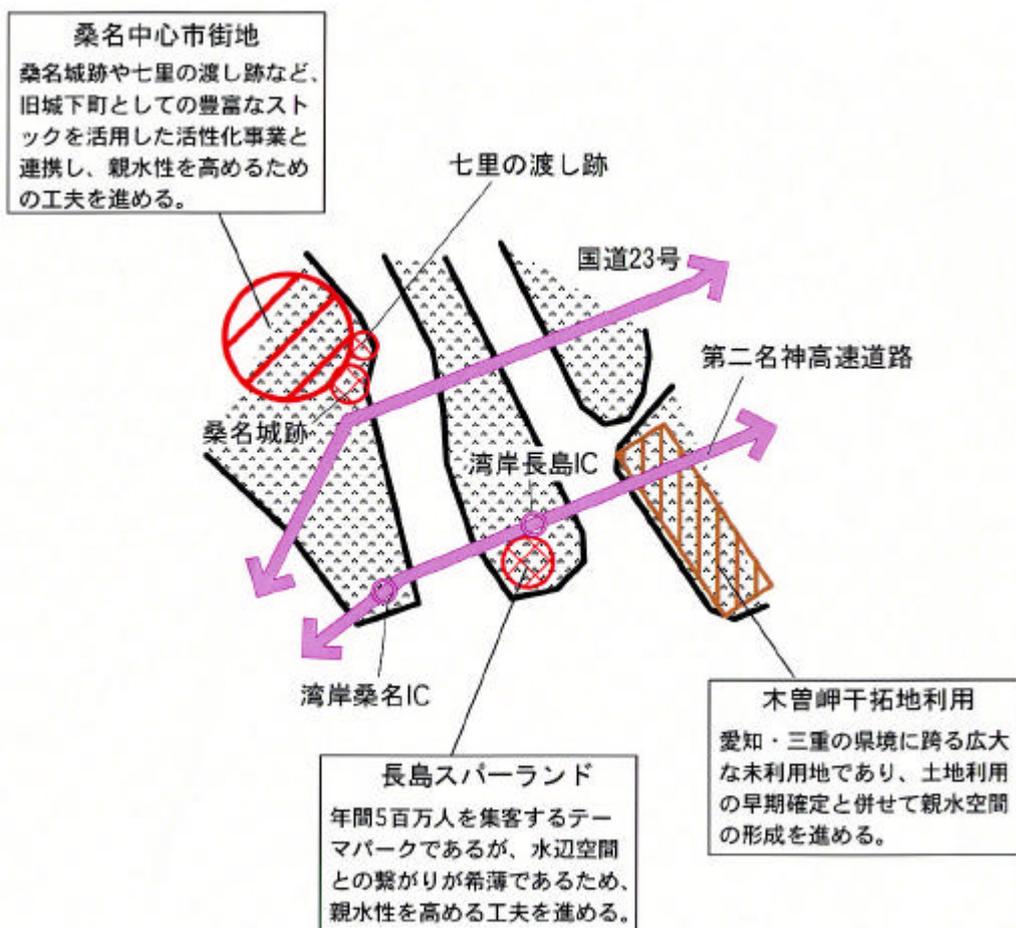


図3 - 4 桑名ゾーンの基本方向

2. 四日市ゾーン（川越町～楠町）

【基本コンセプト】

“環境と調和した躍動感あふれるみなとゾーン”

我が国有数の近代港湾である四日市港の高度化を図るとともに、市民が“みなと”の歴史、文化、自然等に親しめるよう、これら資源の魅力とアクセシビリティを向上させていく。

【基本的な方向】

本県の産業経済、物流を支えてきた四日市港では、国際海上コンテナターミナルの整備など港湾の高度化に向けての取組や石油化学コンビナートの再生など産業の構造転換への取組がなされつつある。こうした四日市港の歩みや産業経済で果たしている大きな役割を広く県民に知ってもらい、四日市港に親しみを感ぜてもらおうような仕掛けづくりが重要である。

このため、四日市港ポートビル展望展示室「うみてらす 14」のPRと機能の充実を図るとともに、活発に展開されている日々の港湾活動を体感できるよう、コンテナターミナルや石油化学コンビナートなどでの見学受け入れの拡大・充実を検討する必要がある。

かつて旧東海道の宿場町として栄え、また、近代港湾として100年を超える歴史を有する四日市港には数々の歴史・文化資源が存在している。また、四日市市は県下第一の人口と産業集積を背景に多様な都市機能が集積されている。

このため、これらの歴史・文化資源、都市機能を有機的に活用し、ネットワーク化していくなかで、臨海部への関心を高めさせ、賑わいをもたせられるような仕掛けづくりを検討する必要がある。こうした検討の中で、現在、企業の利用によって一般市民が立ち入ることができない海岸や岸壁について、少しでもアクセスできるような工夫が必要である。

また、現在検討されている中部国際空港への海上アクセス基地の整備については、伊勢湾と触れ合うフロントとして位置づけ、多様な機能を備えた賑わい空間の形成を図るとともに、海上アクセス基地への陸上ネットワークのあり方についても検討する必要がある。

市民の憩いの場として、霞ヶ浦緑地公園をはじめ公園等が整備されているとともに、高松海岸には河口干潟が残されている。

このため、引き続き、親水性に配慮した緑地公園等の整備を図るとともに、高松海岸の河口干潟については、その重要性など住民意見を参考にして、霞4号幹線のルート選定等を検討する必要がある。

【主なアクセスポイント】

川越電力館
 高松海岸
 四日市港ポートビル
 霞ヶ浦緑地公園
 潮吹堤防
 未広橋梁
 千歳地区
 吉崎海岸

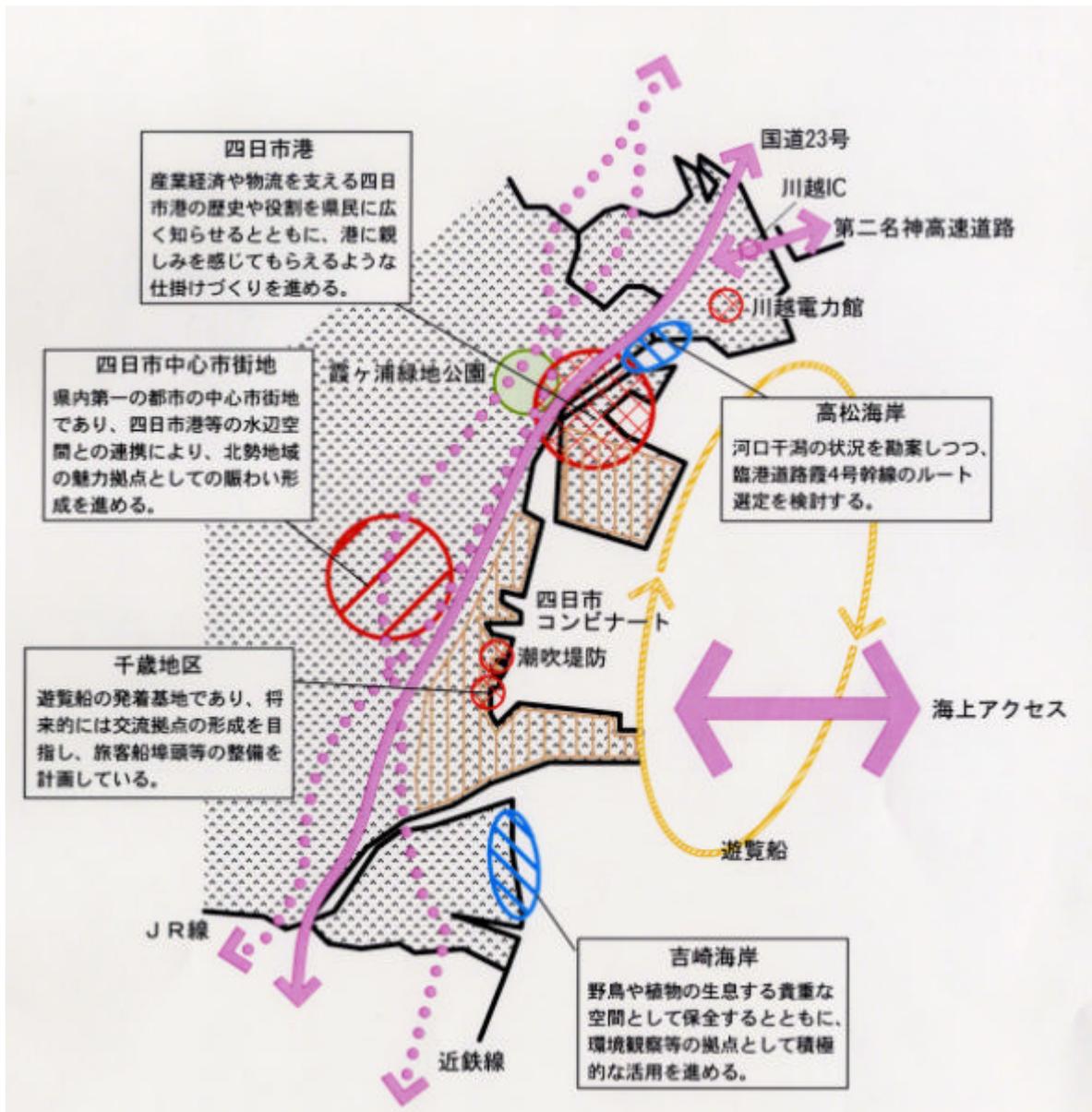


図3 - 5 四日市ゾーンの基本方向

3. 鈴鹿ゾーン（鈴鹿市）

【基本コンセプト】

“ 白砂青松の前浜、リフレッシュゾーン ”

白砂青松の海岸が続き、周辺住民の「前浜」として親しまれるとともに、伊勢の海県立自然公園に指定されており、リフレッシュの場として適正な利用と保全を図っていく。

【基本的な方向】

千代崎海岸、鼓ヶ浦海岸では白砂青松の海岸が続き、海水浴場として広く利用されているとともに、周辺住民の「前浜」として憩いの場、リフレッシュの場として親しまれており、伊勢の海県立自然公園に指定されている。

このため、海水浴場として、また、前浜として適正な利用と保全を図るため、地元住民と行政が協働して、自然公園法、海岸法などを活用しながら、ごみ投棄問題、車両乗り入れ問題、廃屋問題、松並木の維持管理、サイン・看板の設置、休憩・修景施設の充実などに取り組んでいく必要がある。また、「前浜」空間を面的に形成・維持していくため、堤防背後地の土地利用のあり方と誘導方策等についても検討する必要がある。

白子港は、大黒屋光太夫や白子廻船ゆかりの歴史を有すとともに、伊勢形紙、鈴鹿墨の2つの伝統的工芸品の拠点ともなっている。また、海苔養殖をはじめとして水産業も営まれ、伊勢湾漁業の研究蓄積を有する県公設試験研究施設も立地している。

このため、これらの歴史・文化資源や水産業の営みなどを有機的にネットワーク化して、賑わい空間が形成できないかを検討するとともに、その中でフィシャリーナ機能の充実も検討する必要がある。

【主なアクセスポイント】

大黒屋光太夫資料館

千代崎海岸

白子港

鼓ヶ浦海岸

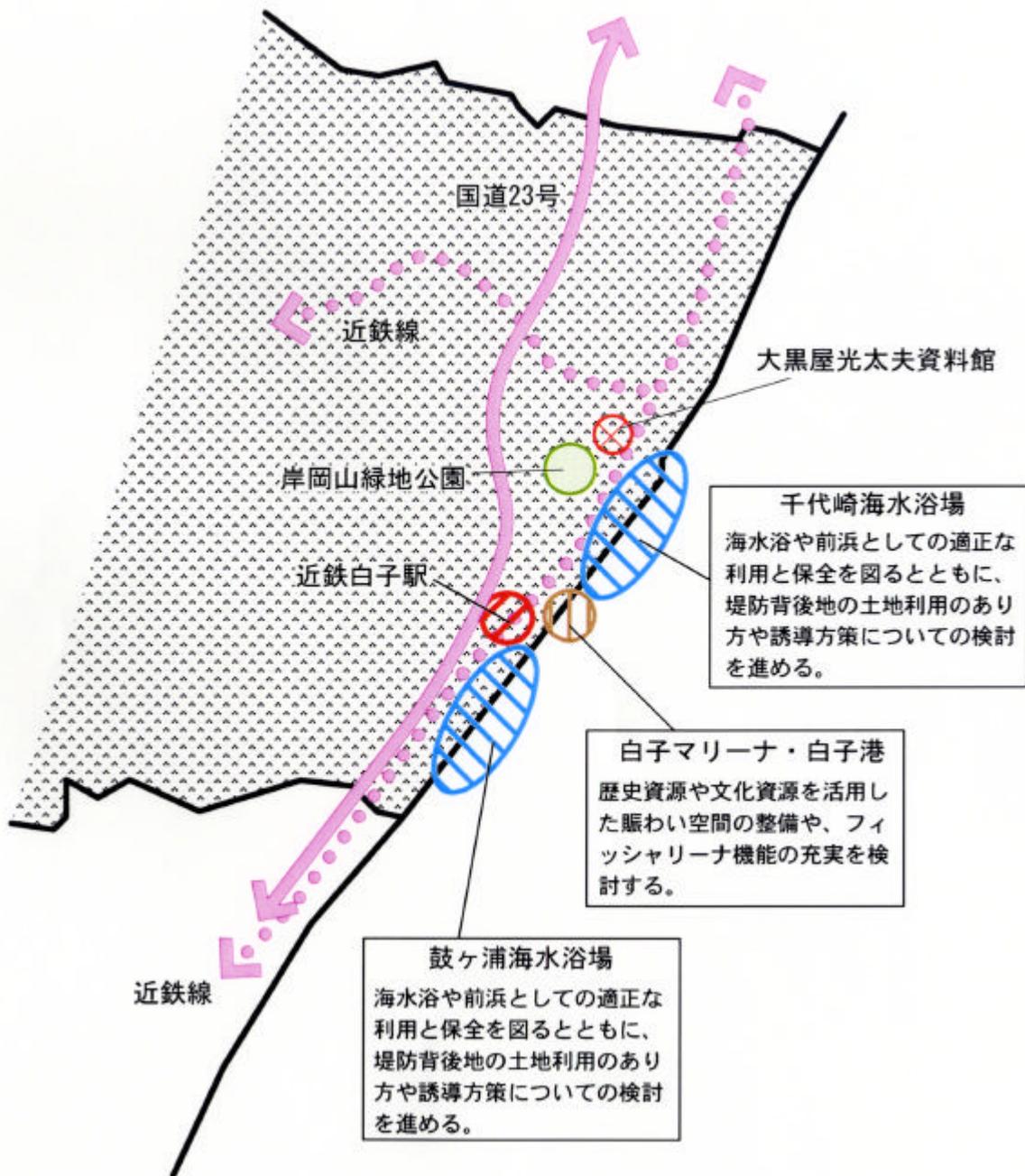


図3 - 6 鈴鹿ゾーンの基本方向

4. 津ゾーン（河芸町～香良洲町）

【基本コンセプト】

“ ハイライフの親水交流ゾーン ”

日本三津の一つとして栄えた津を中心に、歴史・文化資源、水産業、造船業、マリナー、自然海岸など、海に関する魅力資源が多様に集積しており、これらを活かした豊かな生活（ハイライフ）を創造していく。

【基本的な方向】

津は、かつて日本三津の一つとして、また、城下町として栄え、数々の歴史文化資源を有している。近代では県庁所在都市として各種のサービス業務機能をはじめとする都市機能が集積されている。

このため、これらの歴史・文化資源、都市機能を有機的に活用し、ネットワーク化していくなかで、海に開かれたまちづくりに関心を高めさせ、賑わいをもたせられるような仕掛けづくりを検討する必要がある。

また、現在具体化が進みつつある中部国際空港への海上アクセス基地の整備については、伊勢湾に開かれたまちづくりのフロントとして位置づけ、自然環境に配慮しつつ、多様な機能を備えた賑わい空間の形成を検討する必要がある。

阿漕浦、香良洲海岸などの海岸では白砂青松の海岸が続き、海水浴場、潮干狩りとして広く利用されているとともに、周辺住民の「前浜」として憩いの場、リフレッシュの場として親しまれており、伊勢の海県立自然公園に指定されている。

このため、海水浴場として、また、前浜として適正な利用と保全を図るため、地元住民と行政が協働して、自然公園法、海岸法などを活用しながら、ごみ投棄問題、車両乗り入れ問題、廃屋問題、松並木の維持管理、サイン・看板の設置、休憩・修景施設の充実などに取り組んでいく必要がある。また、「前浜」空間を面的に形成・維持していくために、堤防背後地の土地利用のあり方と誘導方策等についても検討する必要がある。

香良洲公園、栗真町屋臨海公園など公園・緑地が整備されているとともに、自然海岸も残されている。

今後も、市民の憩いの場として適切な維持管理に努めるとともに、自然海岸の保全について自然公園法、海岸法などの活用を検討する必要がある。

造船関連企業やマリナーの立地、水産加工業の集積など海に関連する産業が立地していることを踏まえ、県民が海への理解を深める契機として活用する方法を検討する必要がある。

【主なアクセスポイント】

河芸マリナー

白塚海岸

鷺崎海岸

伊勢湾海洋スポーツセンター

阿漕浦・御殿場海岸（海水浴場、潮干狩り、阿漕塚、観海流発祥の地）

NKK

香良洲海岸

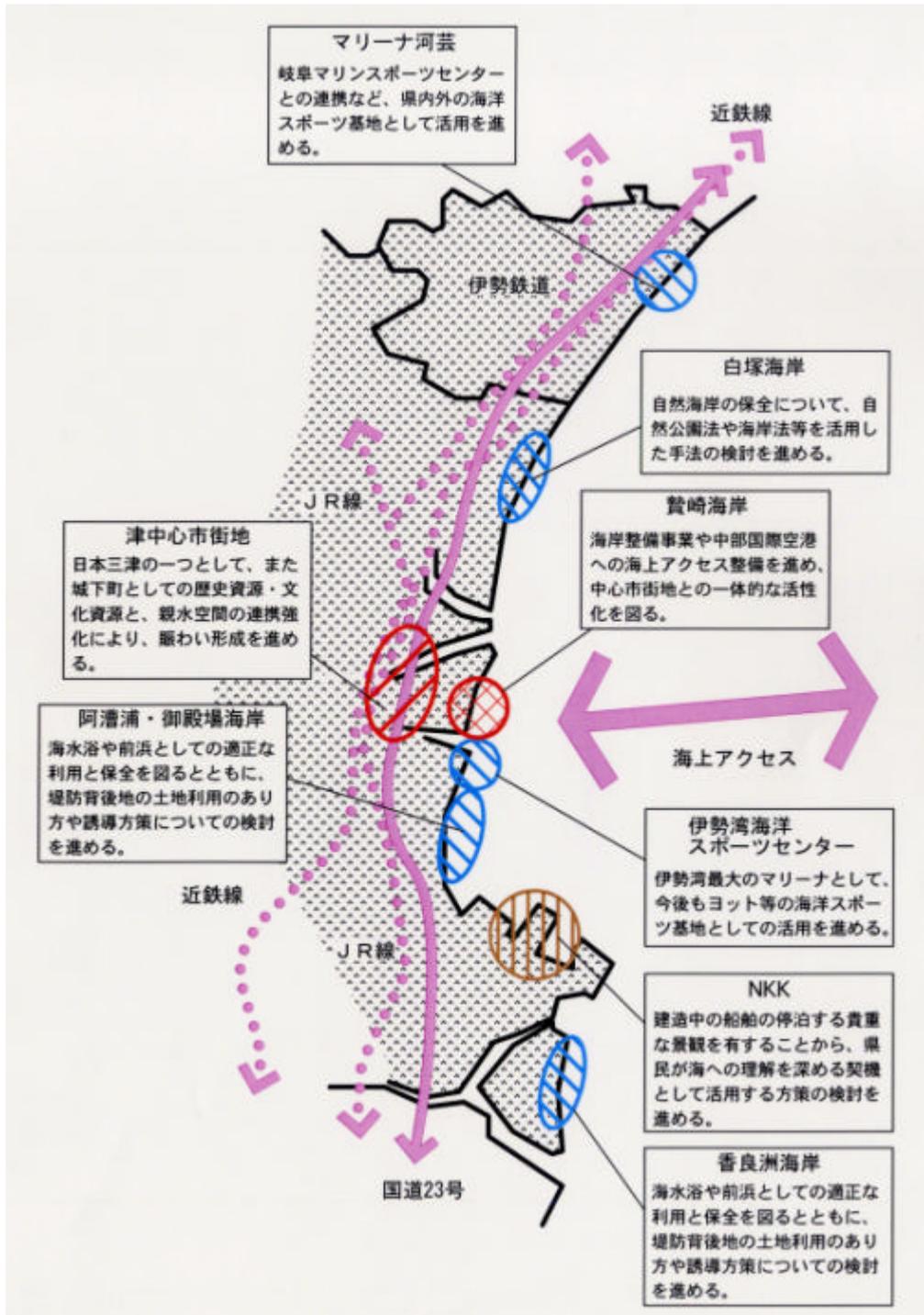


図3-7 津ゾーンの基本方向

5. 松阪ゾーン（三雲町～明和町）

【基本コンセプト】

“自然活用型の体験・リフレッシュゾーン”

多様に利用されている自然海岸をはじめとして、藻場、干潟、湿地や漁港など、自然活用型の資源が多く、海を体験しリフレッシュできるゾーンとして、適正な利用と保全を図っていく。

【基本的な方向】

五主海岸、松名瀬海岸などの海岸は潮干狩りの場所として広く利用されているとともに、周辺住民の「前浜」として憩いの場、リフレッシュの場として親しまれている。

このため、前浜として適正な利用と保全を図るため、地元住民と行政が協働して、自然公園法、海岸法などを活用しながら、ごみ投棄問題、車両乗り入れ問題、松並木の維持管理、サイン・看板の設置、休憩・修景施設の充実などに取り組んでいく必要がある。また、「前浜」空間を面的に形成・維持していくために、堤防背後地の土地利用のあり方と誘導方策等についても検討する必要がある。

河口部を中心に藻場、干潟、湿地が残されているところがある。これらの残された自然については、堤防背後地の土地利用のあり方等も含めて面的な保全方策を、行政と地元住民とが協働しながら検討していく必要がある。

獺師漁港などいくつかの漁港が整備されているが、漁港の活性化のために、松阪中心市街地との連携の中で、フィシャリーナ機能の充実を検討していく必要がある。

河口、漁港などによりラテラルアクセスが分断されがちであるので、適切なサインの設置などを検討する必要がある。

松阪港については、既存岸壁の増深改良を行うとともに、物流需要の増大や船舶の大型化に対応した物流機能の充実強化を図る。また、一般市民が港に近づきやすくなるような施設を充実し、アクセスポイントとしての機能を高める。

【主なアクセスポイント】

五主海岸

松阪港

松名瀬海岸

大淀海岸

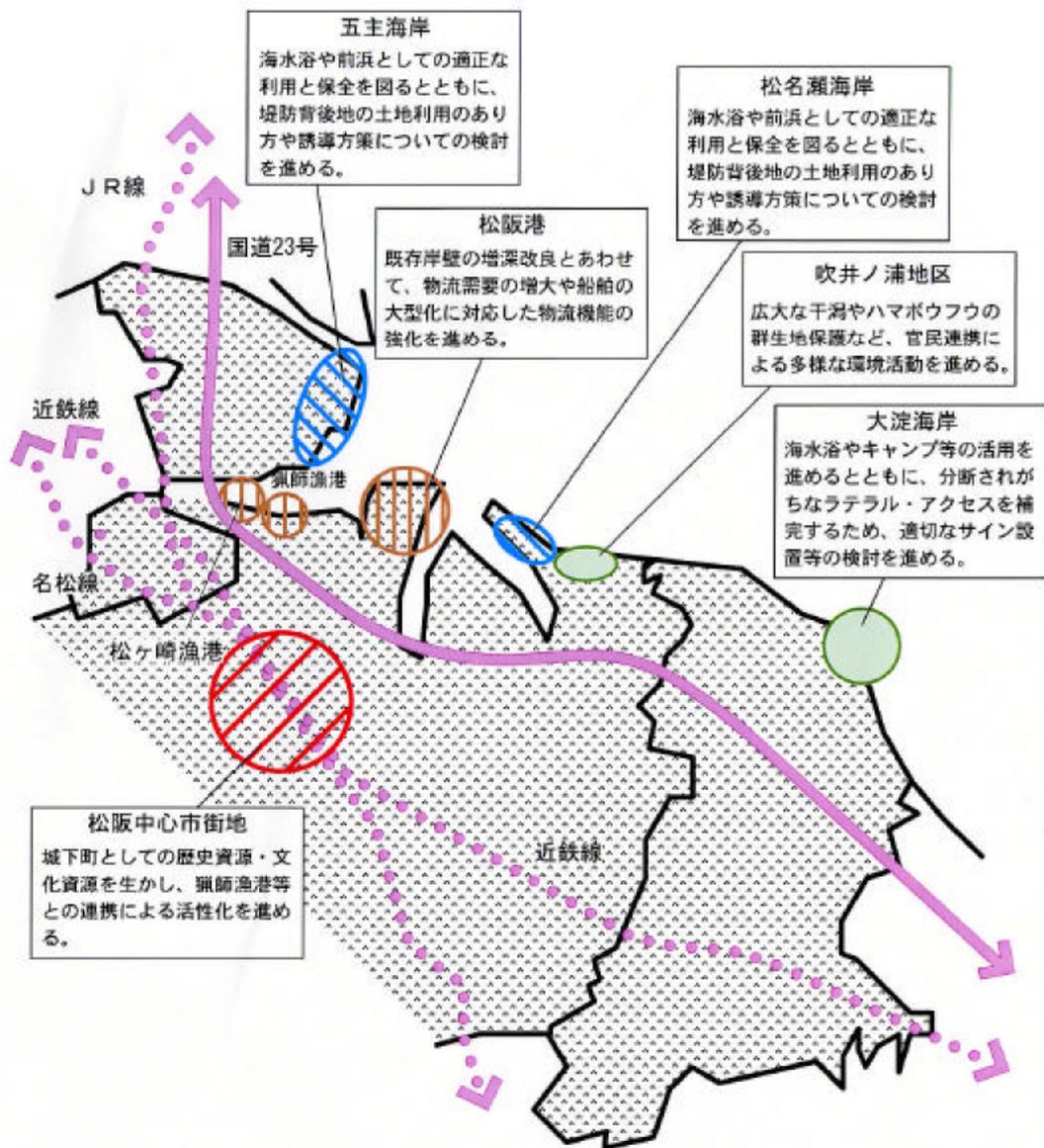


図3-8 松阪ゾーンの基本方向

6. 伊勢ゾーン（伊勢市～二見町）

【基本コンセプト】

“海と歴史の体験ゾーン”

海に関する歴史・文化等の観光資源が多く、これに体験漁業や環境学習等を連携させた取組実績を蓄積させ、海と歴史が体験できるゾーンとして情報発信していく。

【基本的な方向】

二見浦、夫婦岩、大湊など海にまつわる多くの歴史・文化資源を有すとともに、伊勢神宮、鳥羽も含めて一大観光地の一翼を担ってきた地域である。しかし、余暇利用の多様化、観光形態の変化などにより観光入込客は減少傾向にあることから、中長期的な観点から観光戦略を検討する必要がある。

このため、現在、行政、民間、市民の協働による伊勢志摩再生委員会が設置され、伊勢志摩再生プロジェクトの提案等の検討が進められている。こうした広域的な戦略検討を踏まえつつ、豊かな歴史・文化資源と環境学習、グルメ、体験漁業との連携など各種資源の総合的な活用戦略の検討を深めていく必要がある。

古くから中小造船所の集積のある大湊では、海を中心に遊んで食べて学べるマリニビレッジが展開されつつある。こうした動きと連動して、他分野の資源、機能との連携・ネットワーク化を進め、海文化の新たな創造を図っていく必要がある。

河口部を中心に藻場、干潟、湿地が残されているところがある。これらの残された自然については、堤防背後地の土地利用のあり方等も含めて面的な保全方策を、行政と地元住民とが協働しながら検討していく必要がある。

豊北漁港などいくつかの漁港が整備されているが、漁港の活性化のために、伊勢市中心市街地との連携の中で、フィシャリーナ機能の充実を検討していく必要がある。

【主なアクセスポイント】

村松漁港、豊北漁港

大湊

二見浦

夫婦岩

二見シーパラダイス

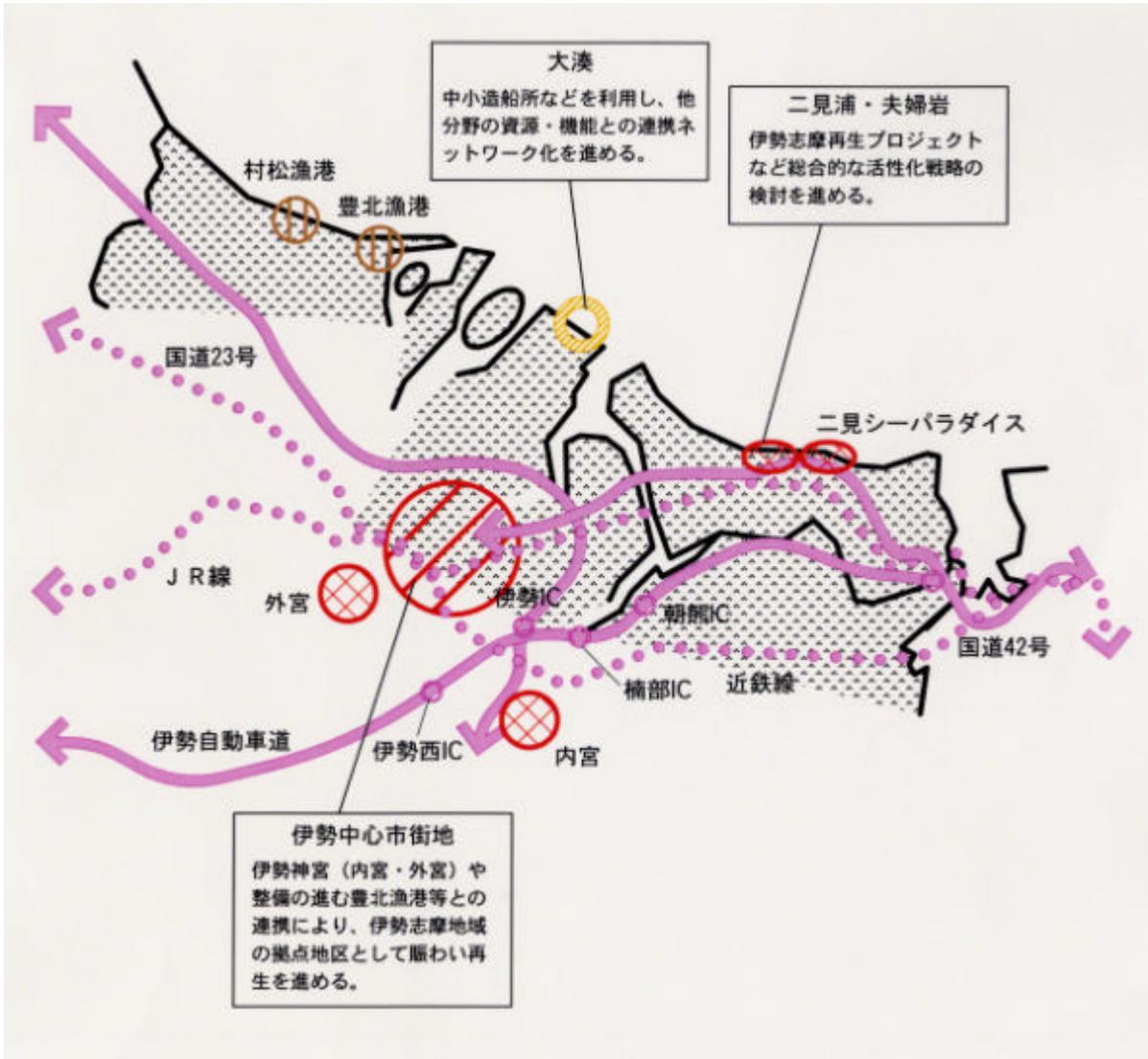


図 3 - 9 伊勢ゾーンの基本方向